

第一代 歡庵

合計九部二十八卷	開國新論	商民新轄法	耕餘致富論	垂統法話	開物新書	甲州傳水利法	物產興起法	農政要略	國士經濟緯論	書名
	一	二	一	三	一〇	五	三	一	二	卷數
										著述年月
	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	既刊未刊 又ハ不傳
										備考

二代 元庵

氣。候。審。驗。抄。錄。	五。倫。講。義。表。	皇。國。度。數。譜。	諸。國。度。數。譜。	山。海。形。勢。圖。譜。	十。字。號。糞。培。例。	漆。園。法。律。	勸。農。要。錄。	開。物。新。書。	皇。國。形。勢。記。	書名
一	〇	一	五	一	二	二	三	一	一	卷數
					文政七年二月 信淵校訂					著述年月
既刊	不傳	不傳	不傳	不傳	既刊	不傳	不傳	不傳	不傳	既刊未刊 又ハ不傳
					單行、家學全集					備考



山復五種製開漁隄隄	相金樹煉物	村。溝。志。圖。	防。溝。志。圖。	防。溝。志。圖。
古開發	秘要術	維持法	維持法	維持法
論法	要術	法	法	法
翼	論法	法	法	法
四	一	七	一	〇
				二
				三
				二
				三
				四
				安永九年二月
不	不	不	不	不
傳	傳	傳	傳	傳
				單行、家學全集、日本經濟大典、房總叢書

五代椿園

書名	卷數	著述年月	既刊未刊 又ハ不傳	備考
----	----	------	--------------	----

合計十部七十卷

警三價策	弊政改革記	農政本義	西洋藥物考	西洋藥物考	三銃用法論	鐵炮窮理論	防海策	西洋列國史略	武備一家言	籌海新書	自走火船三枚圖說	種樹秘要	開物論	後日記
一	二	三	二	一	三	二	二	二	五	五〇	二	二	七	一
天明六年	天明七年	寬政十年	文化三年	文化三年	文化五年二月	文化五年十一月	文化五年十二月	文化五年十二月	文化五年	文化五年	文化六年六月	文化六年八月	文化七年	文化九年二月
不傳	不傳	不傳	未刊	未刊	未刊	既刊	既刊	既刊	不傳	不傳	未刊	既刊	不傳	未刊
						單行	單行	家學大要、家學全集、近時海國必讀書、日本海防史料叢書	中古叢書、家學全集				單行、家學全集	



別本内洋經緯記	復古論	祭禮新式論	農政本論	草木六部耕種法	禹貢集覽	薩藩經緯記	甘藷諸緯	實武一家言說	一隊轉戰法	内洋經緯記	勢古石傳來說	論筑後河水害	物價餘論	夢々物餘語
一	一	一〇	二	二	二	一	一	五	一	一	一	一	三	一
文政十一年十月	文政十一年頃	文政十二年正月	文政十二年四月	文政十二年六月	文政十三年三月	天保元年八月	天保四年六月	天保四年六月	天保四年十月	天保四年十月	天保四年十月	天保六年五月	天保九年秋	天保十年春
既刊	不傳	不傳	既刊	既刊	既刊	既刊	未刊	既刊	既刊	既刊	既刊	既刊	既刊	既刊
家學全集			單行、家學全集、日本經濟大典 大日本思想全集	單行、家學全集、日本經濟大典	家學全集	單行、家學全集	家學全集	家學大要	單行、家學大要、家學全集、印 篇沼經緯記、房總叢書	家學大要、家學全集	家學全集	家學大要、家學全集、信淵集、 日本經濟大典	日本文庫、海防叢書、日本海防 史料叢書	

田。峻。年。中。行。事。	別本物價餘論	上宇和島世子封事	弊政改革秘話	遊歷記事並泉源法	丹波巡察記	農政學解嘲辨	濟民瑣言	鷄糞提聚法	責難聚錄	兵法一家言	鳥羽領經緯記	禦侮儲言	農政教誡六箇條	物價餘論簽書
三	一	一	一	一	三	一	二	一	二	二	一	四	一	二
天保十年二月	天保十年四月	天保十年	天保十年九月	天保十一年六月	天保十一年七月	天保十一年九月	天保十一年九月	天保十一年	天保十二年二月	天保十二年	天保十二年十月	天保十二年三月	天保十三年七月	天保十三年八月
既刊	既刊	未刊	既刊	既刊	未刊	既刊	不傳	未刊	既刊	未刊	既刊	未刊	既刊	既刊
單行、家學全集	家學全集、日本經濟大典		家學全集	家學全集		家學大要、家學全集		單行、家學全集		家學全集	單行、家學全集	單行、家學全集	單行、家學全集、信淵集、日本 經濟大典	



存華挫狄論	陸戰法秘訣	水戰法秘訣	硝石製造辨作焰硝製造方	山物論	牡牛馬法	律令合璧	協中錄	日向經緯記	紀州藩御分國經緯略記	苗木作付法	牧馬法	中國九州紀行	信淵先生書簡集	佐藤玄海議
-------	-------	-------	-------------	-----	------	------	-----	-------	------------	-------	-----	--------	---------	-------

五 二 三 一 一 五 〇 一 一 一 一 一 一 一 一

嘉永二年四月  
嘉永二年八月  
嘉永二年九月  
嘉永七年七月

既刊 未刊 未刊 既刊 不傳 不傳 不傳 不傳 既刊 既刊 既刊 既刊 既刊 既刊 既刊

家學全集  
單行  
家學全集  
家學全集  
家學全集  
家學全集  
家學全集  
家學全集  
家學全集  
海防彙議、日本海防史料叢書

草綿種子撰法	幽風古義精蘊	提新新論	火新新造法	火新新書	火術秘法錄	火攻深秘錄	彈藥後裝炮秘訣	垂統泉源法	四海遊歷記	石版製法	洋紅製法	寫真鏡製法	椿園秘記	花だんの朶
--------	--------	------	-------	------	-------	-------	---------	-------	-------	------	------	-------	------	-------

一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊 未刊







合計二百五部五百六十三卷	西海漫遊記	全世界遊記	自凝島の記	國土の數表	貧民事業録	開物餘材録	南游記	環海彙聞録	山民産業録	水戰新書	車戰要録	通商論
	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	二
	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳	不傳
	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

歡庵翁以下五翁の著書を作者別に分類するに、實に左の如き驚異的數字を示してゐる。

合 計	作 者					要 項	
	椿	玄	不	元	歡	部 數	既 刊
	明	味					
	園	窩	軒	庵	庵		
七二	六三	三	三	二	一		
一五七	一三〇	一一	九	七	一		
一一〇	一〇九	一					
一四七	一四四	三					
六九	三三	六	一三	八	九		
四五四	二九一	五六	五五	二四	二八		
二五〇	二〇五	一〇	一六	一〇	九		
七五八	五六五	七〇	六四	三一	二八		

備考

- 一、書名傍側の圈點は家傳書を示す。
- 二、卷數未詳の書は、假りに一卷として計算せしを以て、實際の卷數はこれより遙かに多きものと知らるべし。

佐藤信淵年譜

年號	年齢	事蹟	家族・親族	師友・門人	著述
明年和	一歳	○六月十五日巳刻出羽國雄勝郡山 村に生る偶と赤氣天に上る家人以て 瑞祥と爲す百祐と命名す時に父信季 (支明窩)四十六歳母蒲生氏(貞静)三 十三歳			
明和	二歳	○家に在りて養育せらる	○父泉藩主本多忠勝侯 に召されて弊政を改革 す		
明和	三歳	○同前	○正月十七日姉きさ す年十二歳して薰眼運 香信女と號す寶泉寺に 葬る		
安永	四歳	○同前			
安永	五歳	○同前	○五月十二日洗容不 清禪童女歿す寶泉寺に 葬る		

安永	安永	安永	安永	安永	安永	安永	天明
三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	元年
六歳	七歳	八歳	九歳	一〇歳	一一歳	一二歳	一三歳
○同前	○家に在りて家訓を受く	○同前	○同前	○同前	○同前	○信淵が高寺村の龍泉寺を遊れて七 高山神社に祈誓を籠めしは此の頃と 思はる	○三月五日父に従ひ西蝦夷に遊び松 前に歸り越年す
						○八月廿二日實相院心 嶽常然居士歿す寶泉寺 に葬る	



寛政三年	寛政四年	寛政五年	寛政六年
二三歳	二四歳	二五歳	二六歳
<p>○正月長州に渡りて馬屋原氏を頼り三田尻の浮野村に滞留して熊谷直利より陸安流の砲術を學び又毛利侯の開作地の指導を爲し廣島御留問屋吉右衛門方に病氣にて二月餘滞留し大島の人河野通廣と交り通廣の船軍法と佐藤家の火術とを交換し尋で岡山に到りて關船の研究を爲し大阪に於て坂本俊登より萩野流の砲術を學び河州の開作を視察し尾州の學館にて開作の事を講じ名古屋に越年す</p> <p>○七月七日伯父式正政す年七十九法諡して龍山活泉居士と號す○從兄長榮の子英吉郎生る</p> <p>○周防國浮野村に於て熊谷丹次郎直利に從ひて陸安流の砲術を修め廣島にて河野四郎左衛門通廣より船軍法を受け岡山にて關船の法を學び大阪に到りて坂本彌八郎より萩野流増補新術の砲術を修行す</p>	<p>○春江戸に歸り京橋柳町に住して醫業を開く○尋で一宮藩主加納遠江守久周侯に召されて其の領地上總國一宮に赴き地引網の世話を爲し又百姓一揆を鎮む</p> <p>○加納侯を致仕して江戸に歸り復京橋柳町に於て醫を業とす</p> <p>○正月廿四日自性院覺邦就還大姉歿す</p>	<p>○淺草雷門の日音院信淵を以て時人なりとし姪女笹原氏名はいせを信淵に妻す實は日音院の兄東叡山の坊官岸本法院の末女なり時に笹原氏芳紀</p> <p>○九月廿八日從兄長榮妻高橋氏歿す法諡して石室妙橋大姉と云ふ</p>	<p>○十一月十一日伯母式正妻細川氏歿す年八十</p>
<p>○正月長州に渡りて馬屋原氏を頼り三田尻の浮野村に滞留して熊谷直利より陸安流の砲術を學び又毛利侯の開作地の指導を爲し廣島御留問屋吉右衛門方に病氣にて二月餘滞留し大島の人河野通廣と交り通廣の船軍法と佐藤家の火術とを交換し尋で岡山に到りて關船の研究を爲し大阪に於て坂本俊登より萩野流の砲術を學び河州の開作を視察し尾州の學館にて開作の事を講じ名古屋に越年す</p>	<p>○春江戸に歸り京橋柳町に住して醫業を開く○尋で一宮藩主加納遠江守久周侯に召されて其の領地上總國一宮に赴き地引網の世話を爲し又百姓一揆を鎮む</p> <p>○加納侯を致仕して江戸に歸り復京橋柳町に於て醫を業とす</p>	<p>○淺草雷門の日音院信淵を以て時人なりとし姪女笹原氏名はいせを信淵に妻す實は日音院の兄東叡山の坊官岸本法院の末女なり時に笹原氏芳紀</p> <p>○九月廿八日從兄長榮妻高橋氏歿す法諡して石室妙橋大姉と云ふ</p>	<p>○十一月十一日伯母式正妻細川氏歿す年八十</p>

寛政七年	寛政八年	寛政九年	寛政十年	寛政十一年	寛政十二年	享和
二七歳	二八歳	二九歳	三〇歳	三一歳	三二歳	三三歳
<p>方に廿歳なり</p> <p>○故郷に歸りて母を江戸に迎へ笹原氏と共に奉養甚だ努む</p> <p>○九月廿八日從兄長榮妻高橋氏歿す法諡して石室妙橋大姉と云ふ</p>	<p>○同前</p> <p>○四月廿一日母蒲生氏貞靜孀人歿す年六十二法諡して清徳院壽量妙法大姉と號す淺草森下町松應寺に葬る</p>	<p>○信淵母を喪ひて悲嘆の餘り身體の衰弱甚だしく爲に祖業を失墜せんことを懼れ是より門人白井喜右衛門の紹介にて上總國山邊郡大豆谷村木村久右衛門を頼り同所に移りて耕種・樹藝を營み且歡庵翁以來の家傳書の校訂増補に努め傍ら醫業を開く</p> <p>○十二月十八日恩師宇田川槐園歿す年四十三淺草誓願寺に葬る</p>	<p>○同前</p>	<p>○正月下旬仙臺より小安峠を越えて郷里に歸省す</p>	<p>○大豆谷に在りて耕種・樹藝・著述・醫業に従事する元の如し</p>	<p>○同前</p>
			○農政本義			

元年	二年和	三年和	元文化	二文化	三文化	四文化	
	三四歳	三五歳	三六歳	三七歳	三八歳	三九歳	
	○同前	○同前	○同前	○正月郷里に歸省し雪中稻庭より山越して仙臺に出で大豆谷に歸る○西國地方に遊歴し薩摩國に至りて還る	○大豆谷に在りて耕種・樹藝・著述・醫業に従事すること元の如し	○大豆谷を去りて江戸に出で京橋柳町に於て外科醫を開く○四月魯西亞人蝦夷の北邊に寇し物情騒然たり時に友人箕浦次郎左衛門の紹介に依り此の冬徳島藩老集堂勇左衛門に聘せられて其の幕僚となり兵學を講ず	○集堂勇左衛門に従ひ義弟勝間伊織・門人後藤喜右衛門・同鈴木平四
法諡して清香妙貞大師と云ふ					○九月九日長男昇太郎生る	○三月廿二日伯父新三郎歿す年八十七法諡して心空智勝信士と號す	○英吉郎西馬管内より來り信淵に従ひ醫を學ぶ
	○三月廿四日九鬼隆都侯統部に生る					○九月十九日同門山村昌永歿す年三十二	
		○二月廿九日坂本孫八郎俊登歿す長崎皓臺寺内眞珠院に葬る					
						○土性辨	○西洋藥物考○西洋藥物考補遺
							○鐵炮窮理論○西洋列

文文化

四〇歳

郎・家來木村新太郎・吉松の五人を率ゐて徳島に赴き南郷富田の二軒屋町に鐵炮鑄造方官署を設け築田秀太郎を奉行とし萩野流砲術師坂本正平を監督とし泉州堺の鐵炮鍛冶惣右衛門及び大阪の鑄物師五助を召抱へ信淵是を指導して大小二百餘座の鐵炮を鑄造し又自走火船・再震雷・紫金鈴・異風炮異様船等を發明せり

ぶ

國史略○三銃用法論○武備一家言○武備海新書

文文化

四一歳

○二月十九日阿州海部郡鮎食河原に於て鐵炮の點放を行ふ○又海上に於て鐵炮の船打を試み或は自走火船の操練を爲す○四月徳島を去り金毘羅・丸龜・高砂・大阪・京都・宇治・奈良・伊勢を経て六月下旬江戸に歸る○若年寄堀田攝津守正教・同植村駿河守家長の命に依り同月廿六日御鐵炮師井上左太夫に自走火船の製法を傳授す其の功勞を賞し白銀十五枚を賜ふ○火船法傳授の後信淵の名聲頗る高く諸家の士大夫及び好事の輩日に集り門前車馬群を爲すに至れるを以て不測の難あらんことを畏れ六月廿四日家族を大豆谷に移らしめ七月二日長崎奉行土屋紀伊守廉直に火船製造法を授け同十三日大豆谷に退き復農を營む

○六月廿一日集堂勇左衛門江戸邸に歿す年六十五芝泉岳寺に葬る○六月廿六日井上左太夫入門

○種樹秘要○自走火船三枚圖說

七 文 年 化	八 文 年 化
四二歳	四三歳
<p>○尾張に遊び藩老小笠原三九郎の需めに依り『開國論』七巻を作る。秋より秋田藩の財政改革を依頼せられ出府して瀬谷小太郎・熊谷惣助・關口半八等と折衝して其の衝に當り秋田の米及び國産を東海より江戸に運漕するの海路を開かんことを計る</p>	<p>○七月廿八日瀬谷小太郎秋田に歸る以後は熊谷・關口兩氏と事を計る。○七月晦日熊谷より來信。○八月六日熊谷惣助より來信。○八月九日江戸出立。○八月廿九日關口半八より來信。○九月九日關口半八より來信。○九月十五日大谷出立。○九月廿九日關口半八より來信。○十月十五日大谷出立。○十月廿九日關口半八より來信。○十一月十五日關口半八より來信。○十一月廿九日關口半八より來信。○十二月十五日關口半八より來信。○十二月廿九日關口半八より來信。</p>
<p>○六月十七日『三銃用火船法』下巻及び『自走岳寺なる集堂勇左衛門の墓前に於て是を燒き以て集堂翁の靈に告ぐ</p>	<p>○正月十六日同門稻村三伯(海上隨鴨)歿す年五十四。○六月二日一宮藩主加納遠江守久周侯卒す年五十九。法號を仁讓院忠烈日義と號す。四谷戒行寺に葬る。○九月廿三日門人山本淡齋より來信。</p>
○開國論	

十 文 年 化	九 文 年 化	十 文 年 化
四五歳	四四歳	四六歳
<p>○江戸日本橋富澤町に移り忠兵衛店を借受け醫業を營む</p>	<p>○正月元日庄左衛門を使者として『私儀不存寄義』を秋田藩江戸詰役人に上る。○同月七日庄左衛門江戸より歸り關口半八の返書を携へ来る。○同月十二日飛脚を以て廻漕船買入の義に就き質問書を關口半八に送る。○同月十九日關口半八より出府に及ばざる旨の回答来る。○同月廿三日英吉郎を使者として熊谷惣助宛一件吟味願及び關口半八宛書翰を携行して出府せしむ。○二月四日英吉郎熊谷・關口の回答を携へ歸る。○同月秋田藩財政改革の願末を記して一巻となし『別後日記』と名け別に書翰を添へて瀬谷小太郎に送る。○熊原氏歿後臺方村に移る。○十二月廿八日財政改革も不首尾に終りしを以て國老西田松塘に宛て封事を上る。</p>	<p>○同前</p>
	<p>○二月十日心月院梅岸了清大姉歿す。○十二月十二日妻熊原氏いせ女大豆谷の寓居に歿す年三十八。法號して淑徳院柔順貞靜日恭大姉と號す。松應寺に葬る。</p>	
<p>○十二月門人松平越後守扶持人深川屋敷住持物師勝間伊織親戚松平大膳大夫家中厄介田中</p>		
	○別後日記 ○大銃車 ○奉呈松 ○塘正田君封	





三 文 年 政	四 文 年 政	五 文 年 政
五二歳	五三歳	五四歳
○大豆谷にて『三銃用法論』を改訂す○越後國高橋園彦・筑前國相田徳穂と平田篤胤の『神字日文傳』上巻の校訂を爲す○五月十五日信淵の和介を以て出羽國庄内鶴岡片町の人佐藤月嶺平田篤胤の門に入る	○小西村の隣村なる冬青村(餅木村)に於て門人橋本延壽・松本治部・根岸延貞の爲に『經濟要略』を著す	
○三月十三日屋代弘賢・伴信友・國友能當等と平田篤胤を訪ひ寅吉の神恩の式を見る○五月屋代弘賢・竹内建雄・上杉篤興等と平田篤胤を訪ひ寅吉の陶界の豆づまの話聞く○九月三日根岸新兵衛平田篤胤の門に入る	○閏正月廿四日九鬼隆都侯家督相續○十二月十九日門人松本治部宛發信	
○天然流砲術三銃用法論○天然流大銃窮理論		○宇内混同秘策○垂統秘錄○開國要論

六 文 年 政	七 文 年 政	八 文 年 政
五五歳	五六歳	五七歳
○大豆谷に在りて思索に耽り著述に従事せしものゝ如し	○下總國船橋に卜居し或は機械を以て海濱を空測し或は船を浮べて東は下總の馬加より南は上總の富津に至り西は武蔵の羽根田より野鳥を経て相模の横須賀に至る迄の沿岸を測量し或は上陸して海濱を巡覽し又は故老に問ひ具に艱苦を嘗めて江戸灣の干拓を研究す	○此の頃信淵の家族は京橋靈巖島に居住す
○四男祐三生る○九月十八日從兄佐藤通元歿す年六十七法諡して南枝通元清居士と號す久保田麟勝院に葬る	○正月廿八日佐藤貢宛發信○四月二十三日太田錦城歿す年六十一○七月十八日長女スカ歿す法諡して佳芳禪童女と云ふ松應寺に葬る○同月廿三日三男勘四郎歿す法諡して秋山冷氣居士と號す松應寺に葬る	○二月十九日平田篤胤・佃屋・前川・江澤等を伴ひ信淵を訪ふ○三月廿五日平田篤胤を訪ふ○
○十月十六日九鬼隆都侯叙爵して從五位下大隅守と改む	○七月十八日平田篤胤弔問に来る○十二月晦平田篤胤を訪ふ	○二月十九日平田篤胤・佃屋・前川・江澤等を伴ひ信淵を訪ふ○三月廿五日平田篤胤を訪ふ○
○宇内混同秘策○垂統秘錄○開國要論	○異風炮異様船製作記○培養秘錄	○太陽正昇度

文政九年	文政十年	文政十一年
五八歳	五九歳	六〇歳
<p>名洗濱の砂鐵・八日市場木綿・鏡子の醬油附近の諸鐵産等を視察し鏡子の醬油商柳仁平治方に滞留してアシカを射留め醸造業・漁業の法を究めて歸る</p> <p>○門人奥山操・加藤淳・根岸豊秋・中西速雄等高弟の爲に『經濟總錄』の至要を採萃して『經濟要錄』を著す</p> <p>○門人根岸延貞の爲に『山相秘録』を校訂して傳授す</p> <p>○『坑場法律』は門人根岸元貞の筆記する所なり</p> <p>薩摩の藩老猪飼央の爲に『經濟提要』を著す</p>	<p>○二月廿六日長男昇庵の侍醫となる</p>	<p>○正月廿六日平田篤胤を訪ふ</p> <p>○二月七日平田篤胤を訪ふ</p> <p>○二月廿六日息昇庵久世長門守侍醫となれるを平田篤胤に報ず</p> <p>○三月七日平田篤胤昇庵の仕官を悦びに來る</p> <p>○三月八日平田篤胤を訪ふ</p> <p>○四月八日平田篤胤を訪ふ</p> <p>○六月十九日平田篤胤を訪ふ</p> <p>○八月八日平田篤胤に返す</p> <p>○九月廿二日平田家より使者來る</p> <p>○十月廿七日昇庵平田家を訪ふ</p>
八月廿六日平田篤胤を訪ふ	○三月晦大槻玄澤歿す年七十一	<p>○經濟提要</p> <p>○別本經濟提要</p> <p>○内洋經濟記</p> <p>○復古論</p> <p>○祭禮新式</p>

文政十二年	天保元年	天保二年
六一歳	六二歳	六三歳
<p>○三月廿一日江戸大火に因り家傳書及び自著稿本殆ど灰燼に歸す</p> <p>○信淵醫師として偶々出府せる伊勢國射和村の豪商竹川彦三郎(竹齋)の京橋南新堀店に招かれしとき其の博學多才なるを識られ是より兩者の交渉始り竹口家との關係も起り射和村新池の開墾竹口家の上總の開墾等を指導することとなり兩家とも永く信淵の扶助者と爲る</p> <p>○薩摩の藩老猪飼央の爲に『農政本論』を著す</p> <p>○此の年家學を大成す</p>	<p>○薩摩の藩老猪飼央の爲に『薩藩經緯記』を著す</p> <p>○央是を老公島津榮翁に獻す</p> <p>○老公是を嘉尚し臣を遣して酒肴料を賜ふ</p> <p>○信淵答禮として『農政本論』を獻す</p> <p>○老公大いに悦び自家牝牡各々三頭を賜ふ</p>	<p>○此の頃信淵は主に深川永代寺境内の寓居に居りしが五月下旬以來昇庵の病氣見舞として日本橋本村木町四丁目茂兵衛店居住の同人宅に二回止宿せしを深川相川町大工平吉前年吉</p>
		○長男昇庵病む
○十月十二日芝高輪の薩摩邸に於て藩老猪飼央の招きに依り數日滞留して開物學を講ず		○渡邊華山入門
○農政本論	○薩藩經緯記	○門人

天保	六年保	五年保	四年保	三年保
六八歳	六七歳	六六歳	六五歳	六四歳
○同前	○門人久留米藩士本莊一郎の需めに依り『論筑後河水害』を著す○鹿手袋に在りて著述に従事せしもの如し	○鹿手袋に在りて著述に従事せしもの如し	○六月武州多摩郡大丸村門人の家に滞留して著述をなす	川家神道講談所普請金滯懸合不行届の爲御構場所徘徊の趣を以て信淵を筒井紀伊守番所へ訴へ出しに依り十一月廿三日江戸十里四方追放に處せられ武州足立郡鹿手袋村名主村田幸藏(實は永堀藤五郎)方に退居せり
宛發信○五月同門橋本	○八月廿二日門人本莊一郎宛發信○九月三日竹川彦三郎を訪ふ○同日竹川彦三郎を訪ふ○同日竹川彦三郎を訪ふ○同日竹川彦三郎を訪ふ○同日竹川彦三郎を訪ふ	○三月朔水野越前守忠邦老中となる○十二月四日同門宇田川玄眞歿す年六十六		
	○論筑後河水害		○實武一家言○一隊轉戰法○内洋經緯記○勢子石傳來説	

天保	八年保	七年	
九年保	六九歳		
七〇歳			
○二月門人渡邊華山の爲に『田駿年中行事』を著す○三月廿五日宇和島藩へ召さるべき旨を達せらる○是より信淵は出府滞留し居たるものと思はる○五月十四日尙齒會へ出席同夜	○三州田原藩主三宅土佐守康直侯の招きに依り三河國田原領を巡回し藩士に耕種法を講明す	○春沼津藩主水野出羽守忠義侯の老臣土方縫殿介の依頼に依り四男祐三を伴ひ沼津領の伊豆・駿河・三河の三國巡察の途次門人江川太郎左衛門を並山に訪れ夫れより巡察を終りて五月始め歸府し同月五日更に門人竹口信義の上總久保田の開墾地視察の爲門人中西素六及び息豊和松の一行四名にて發足し數日後江戸を経て鹿手袋に歸る○後足痛を病みて病臥すること四十餘日に及ぶ○六月中旬出府し七月二日日本所の江川邸を訪ひしも太郎左衛門歸國中なりし爲歸村す○秋字和島藩主伊達遠江守宗紀侯の需めに因り『物價餘論』を著す○十月上旬出府して同月十一日竹川彦三郎を訪ひ同十五日尙齒會に出席したる後鹿手袋に歸る	宗吉歿す年七十四
○八月廿四日昇庵妻病歿す法證して秋岸貞涼大姉と云ふ○九月十二日昇庵妻の遺骸を松應寺に葬る			
○正月門人渡邊華山『憤機論』を著す○四月八日門人江川太郎左衛門宛發信○五月十四日門人渡邊華山捕はる○	○四月門人渡邊華山『缺舌或問』を著す○七月二日江川太郎左衛門を本所の江戸邸に訪ふ○同七日門人江川太郎左衛門宛發信○九月三日字和島藩士小池九藏若松惣兵衛入門○十月十一日竹川彦三郎を訪ふ○十月友人高野長英『夢物語』を著す	○物價餘論	
○夢々物語○田駿年中行事○培養秘録(第廿一章迄)○			



天保十二年	七三歳	○盛岡藩主南部信濃守利濟侯信淵を祿仕せしめんとせしも老齡の故を以て是を辭任す○『實錄』を作りて宇和島藩主伊達遠江守宗紀侯に獻す○宇和島藩主伊達遠江守宗紀侯及び綾部藩主九鬼式部少輔隆都侯の請ひに因て『兵法一家言』並に『禦侮備言』を著して是を上る○此の年春以來病みつゝも著作に耽り『兵法一家言』の如き大著をなせり	○三月廿一日宇和島藩士小波軍平高島秋帆の門に入る○七月門人江門太郎左衛門高島秋帆の門に入る○十一月二日四男祐三病歿す年十月八日法諡して實道祐參居士と號す松應寺に葬る○息昇庵南部藩の侍醫に任ぜらる○十二月廿五日次女リを根津清左衛門に嫁す	○五月十八日友人屋代弘賢歿す年八十四○同月廿二日門人小池九藏宛發信○六月十三日信州松代藩主眞田信濃守幸賢侯老中となる○十月十一日門人渡邊山自歿す年四十九○十一月十八日竹口喜左衛門宛發信○十二月廿五日門人江川太郎左衛門宛發信	○資難錄○兵法一家言○禦侮備言○鳥羽領經緯記
天保十三年	七四歳	○八月初『物價餘論』を著し宇和島藩主伊達宗紀侯に呈し暗に水戸烈公の閱覽に供せんとしたるものゝ如し○九月十二日『濟四海困窮建白』を著す蓋し老中水野越前守忠邦に建白したるものなるべし○十月廿七日南部行の餞別として宇和島藩主伊達宗紀侯より銀二枚及び蠟燭等を賜はる○信淵の赦免運動起りしを以て年末鹿手袋に退く	○二月朔去年四男死去に付伊達侯より弔問とてわらび粉を下さる	○四月四日綾部藩主九鬼隆都侯二條城在番となる○門人鹽谷宗陰に依り信淵の赦免運動起る○七月廿九日門人小池九藏宛發信○九月廿日竹川彦三郎を訪ふ○同月廿二日竹川彦三郎宛發信	○物價餘論○資難錄○濟四海困窮建白○農政教誡○六箇條

天保十四年	七五歳	○三月廿七日宇和島藩主伊達宗紀侯に家傳書を獻ぜしを以て同侯より金壹兩を賜はる○五月晦伊達侯歸國に就き中折貳束を賜はる○六月廿日伊達侯に書物を供覽せるに依り宗紀百疋を賜はる○宇和島藩主伊達宗紀侯世子宗城公の需めに應じて『秘傳種樹園法』を又綾部藩主九鬼隆都侯の需めに因り『種樹園法』を著す	○四月將軍家慶日光廟參拜に付息昇庵上野宮に父の赦免を歎願す○此の頃昇庵は京橋靈巖島長崎町一丁目長兵衛店に住し南部侯の侍醫たり	○前年よりの赦免願は幕府の取上ぐる所となり此の年更らに九鬼隆都侯・老中眞田信濃守幸賢等奔走せしも町奉行島居甲斐守遂に肯んぜず沙汰止みとなる○五月二日九鬼隆都侯二條城在番を免ぜられ歸府○五月山鹿素水九鬼家に雇はる○九月十五日九鬼隆都侯『勵武園歌』を作る○閏九月十一日平田篤胤歿す年六十八○同月十三日老中水野越前守忠邦罷む	○秘傳種樹園法○種樹園法○秘傳種樹園法○秘傳種樹園法○秘傳種樹園法
弘化元年	七六歳	○此の頃信淵は鹿手袋に倚居して専ら其の提唱に拘かる平準法を基礎とせる復古主義の經濟書を記述するを任とせるが此の年の冬一貴人の請問に因り『經濟問答』を著せり	○正月廿六日九鬼隆都侯本所下邸に於て甲冑着人数調練を爲す○三月朔九鬼侯吹上に於て馬術を將軍の覽に供す○三月七日九鬼侯書院の覽に於て槍術を將軍の覽に供す○四月三日九鬼侯吹上に於て馬術を將軍の覽に供す○老中眞田信濃守幸賢罷む○六月十四日水野越前	○致富小記○濟民備說○木村子虛○復古法○經濟問答	

弘化二年	七七歳	<p>○正月八日老中水野越前守忠邦近臣秋元宰介を鹿手袋に遣し復古法の意に就き詳細に尋ね同月十八日迄に答書を書き同月十三日右答書として『復古法概言』の草稿を作りしものとき信淵持病の痛風俄に起り筆を執ること能はざるを以て幸ひ江戸より年賀に來れる門人岩川知平をして是を清書せしむ然るに秋山宰介より何等音信なく二月廿二日老中水野越前守忠邦は罷免せられしを以て遂に此を提出に至らずして止む○赦免の件鳥居甲斐守謙藏の峻拒に因り沙汰止みとなりしを以て信淵は復此の年の末頃より江戸に歸り靈岸島長崎町一丁目長兵衛店昇庵の許に居りしものゝ如し</p>	<p>○二月廿二日老中水野越前守忠邦罷免○三月廿二日綾部藩主九鬼隆都侯本所下邸に於て甲冑着人数調練をなす○同月廿五日門人岩川知平より來信○同月廿七日友人高野長英獄を逃る○五月十一日竹川彦三郎宛發信○七月朔九鬼隆都侯大阪在番となる</p>	<p>○復古法概言○復古法問答書○養書目録</p>
弘化二年	七七歳	<p>○正月十五日江戸大火に因り昇庵の宅も土蔵を始め全部類焼し昇庵が僅かに家傳書廿九部二百七十六冊を持退せしのみにて一家身を以て逃る信淵此のとき江戸に在り家族と共に諸所に流落すること四十餘日二月末舊</p>	<p>○四月一日同門佐々木中澤歿す年七十五○同月廿四日門人小池九蔵宛發信○閏五月十日友人鈴木春山歿す年四十六○八月七日綾部藩主</p>	<p>○翻下説○自走火船説○復古説</p>

弘化四年	七九歳	<p>宅の向側通三丁目角内田と稱する酒店より御堀の方三軒目の所に地所を借り家屋を建て此處に移轉せり新居は日本橋本銀町二丁目十二番地なるべし此のとき信淵は元氣なりしも類焼後老衰一入加はれり○八月廿八日文恭院三回忌法要の大教に依り戸田山城守の掛りを以て同年十二月赦免せられ一家團樂の樂しみを共にするを得たり○冬以來九鬼侯邸に於て安濃津藩主藤堂和泉守高猷侯其の弟豊後岡藩主中川修理大夫久昭侯に召され家學を諮問せらる○此の年冬より信淵老衰殊に甚だし</p>	<p>九鬼式部少輔隆都侯大阪在番交代同月廿九日歸府</p>	<p>○經濟秘書○吞海學基論序○權貨論○防海餘論○自走火船法○東西火攻辨</p>
弘化四年	七九歳	<p>○正月安濃津藩主藤堂高猷侯の需めに應じ『吞海學基論序』を著し同二月復藤堂侯の爲に『防海餘論』一篇を草し是に『經濟問答』・『東西火攻辨』・『水陸戰法錄』・『水戰秘訣』・『陸戰秘訣』・『自走火船法』の六部廿三卷を附屬せしめ是等を總稱して『防海餘論』と名づけ侯に上れり○三月廿一日竹川彦三郎に多年蒐集せる蘭畫及び家傳の秘書を賣却せり蓋し罹災後の家屋復興の爲なるべし○此の年早春以來九鬼侯との音信を絶つに至れり</p>	<p>○二月十六日友人中山業智を訪ふ○同月十七日友人中山業智信淵を訪ふ○三月廿一日竹川彦三郎宛發信○綾部藩主九鬼隆都侯山鹿素水より軍學符傳を受く○同月三日九鬼侯大帥河原迄騎乘○同月五日門人小池九蔵宛發信</p>	<p>○經濟秘書○吞海學基論序○權貨論○防海餘論○自走火船法○東西火攻辨</p>

嘉永元年	嘉永二年	嘉永三年
八〇歳	八一歳	八二歳
<p>○五月安濃津藩主藤堂高猷侯の爲に門人鹽谷世弘が『阿芙蓉堂聞』・齋藤子徳が『鴉片始末』・長山貫が『清英合戦記略』等に據り是に自ら見聞せる雜説を會集して『水陸戦法録』を著し是を呈せり</p>	<p>○四月復安濃津藩主藤堂和泉守高猷侯の爲に『存華挫狄論』を作りて是を上れり○又病臥中にも拘らず『陸戦法秘訣』及び『水戦法秘訣』を完成せり是れ實に信淵が最後の著述なりとす○六月より宿病漸く迫り更に食を甘んぜず九月の始めより平臥して食せざること一百十餘日に及べり</p>	<p>○正月元日病大いに漸めり信淵詩を得たれども自ら書する能はず昇庵に命じて是を書せしむ○同月六日の晩景眠るが如く歿す享年八十二法諡して眞武院賢剛徳祐居士と號す○同月廿三日松應寺に葬る其の出棺のとき青山某其の外大名・旗下の士等送葬する者廿町餘に接續せりと云ふ○五月友人横田敬忠文を撰し昇庵碑を松應寺に建立せり</p>
		<p>○五月友人横田敬忠信淵の墓碣文を撰す</p>
	<p>○二月九日綾部藩主九鬼隆都侯小金井迄騎乗 ○同月廿八日九鬼侯馬印金扇を改め下西大吹貫(龍門八幡)に改む○五月十日友人清水俊藏歿す年八十二○八月二日九鬼侯二條在番となる</p>	
	<p>○古法銃彈徑定律○砲銃製作寸尺法○水陸戦法録○新製小艇放火銃造明辨</p>	<p>○別本權貨法○經濟問答秘記○存華挫狄論○水陸戦法秘訣</p>

佐藤信淵終

同じ著者によりて

是耶非耶	井伊大老	明治四十四年	青山堂
名家紀行	總水房山	大正三年	房總研究會
修身例話	原據の研究	大正十四年	大同館
詠史句集		昭和三年	榊原文盛堂
少年太田道灌傳		昭和十二年	大同館
佐藤信淵	宇内混同秘策	昭和十二年	大同館
勤皇烈士の師父	東條一坐	近刊	

昭和十六年五月八日印刷  
昭和十六年五月三日發行

佐藤信淵  
四圓五拾錢

著者 鴫田惠吉  
東京市澁谷區戸塚町一ノ四四八  
 發行者 北原義太郎  
東京市神田區小川町一丁目十一番地  
 印刷者 綾部喜久二  
東京市神田區小川町一丁目十一番地  
 印刷所 宮本印刷所

發行所

東京市澁谷區  
戸塚町一丁目

大觀堂  
電話東京四六六一番  
電話牛込六六六三番



大觀堂刊行書書目

本庄陸男著	石狩	川	五十五版	送一・一七〇
同著	石狩	は懐く	十二版	送一・一六四〇
同著	女の子男の子		五版	送一・一八四〇
堀田昇一著	自由ヶ丘	バルテノン	三版	送一・一三〇〇
山田多賀市著	耕	土	五版	送一・一七四〇
富永次郎著	黄	昏	三版	送一・一五四〇
上田廣著	指導	物語	九版	送一・一七四〇
井上友一郎著	夢	去りぬ	五版	送二・一〇四〇

飯田敏雄著	イギリス文學全史	重好	重好	送三・二八二〇
尾島庄太郎著	英詩文叢攷	重好	重好	送三・一五四〇
石川巖著	藤村書誌	限三百部	限三百部	送〇・二〇二〇
菊岡久利著	詩集見える天使	限五百部	限五百部	送二・一〇四〇
犬田卯著	農民文學入門	重好	重好	送一・一五〇〇
岩上順一著	文學の饗宴	新刊	新刊	送一・一八四〇
高野彌一郎譯	☆ フランス敗れたり	二百版	二百版	送一・一三〇〇

山室コブセ	ニイルス・リーネ	五版	送一七〇
中川ユトリ	詩人と國家	最新刊	送一五〇
高野彌一郎	フランス戦線	最新刊	送一五〇
小林龍雄	☆ クロディヌの家	最新刊	送一三〇
橋本福夫	マンスフィールドの手紙	近刊	
武者小路實篤	新しき家	近刊	
稻垣達郎	作家の肖像	近刊	
鶴田恵吉	佐藤信淵	近刊	



普論  
 生殖類論  
 百原  
 食物  
 衣料  
 藥物  
 油脂  
 材木  
 諸  
 器  
 物  
 染料  
 名  
 花  
 木  
 類  
 之  
 論  
 食  
 料  
 衣  
 料  
 油  
 脂  
 染  
 料  
 藥  
 物  
 材  
 木  
 骨  
 用  
 齒  
 甲  
 及  
 珍  
 禽  
 奇  
 獸  
 等  
 之  
 載  
 通  
 計  
 九  
 百  
 三  
 十  
 條  
 全  
 部  
 八

本  
 物  
 會  
 之  
 概  
 論  
 是  
 亦  
 無  
 言  
 未  
 述  
 近  
 來  
 第  
 一  
 年  
 來  
 心  
 裁  
 物  
 產  
 甚  
 諸  
 品  
 制  
 衣  
 煉  
 之  
 術  
 天  
 地  
 之  
 力  
 物  
 之  
 性  
 質  
 與  
 其  
 理  
 之  
 說  
 之  
 著  
 者  
 之  
 說  
 造  
 化  
 之  
 論  
 在  
 行  
 之  
 也  
 上  
 論  
 之  
 五  
 石  
 類  
 之  
 論  
 朱  
 王  
 七  
 之  
 論  
 之  
 論

終